

# 邪馬台国のみなとと貿易

小合 彬 生

(タイ国工業用地公社)

## 目 次

### まえがき

1. 邪馬台国の実像
2. 邪馬台国の形
3. 邪馬台国研究の概観
4. 21ヶ国の比定と邪馬台国の地勢
5. 邪馬台国の海運・貿易
6. 邪馬台国のみなと

### むすび

### まえがき

第28回港湾経済学会の大会で、3世紀の北九州とその港に関する考察を報文として発表した<sup>1)</sup>。本論では、邪馬台国の貿易と港の姿を追求する。

倭国とは、日本のことを昔中国人が呼んだ名である。倭国の記事は、漢、魏、宋などの古い記録<sup>2)</sup>にあるが、もっとも多くの情報量を持ち公平に書かれているのは、魏（AD 226～265年）の史書・魏志（AD 285年完成）の中の倭人項<sup>3)</sup>である。わが国の歴史書は、西暦712年の古事記が有名だが、卑弥呼の時代から450年も後の作品である。わが国の歴史の中で3世紀の北九州だけが倭人伝により浮かび上がっている。そこで倭人伝が述べている、3世紀のわが国の港湾と海運そして貿易について分析を進めてみたい。

## 1. 邪馬台国の実像

多くの論文が発表されているにもかかわらず、歴史の研究者はまだ具体的に邪馬台国の姿をつかみかねている。最近の研究は、今までに提案されてきた候補地を集計したり分類してはいる<sup>5) 6)</sup>。しかし、その国は3世紀に確かに

日本のどこか、ある1ヶ所に存在したはずであり、数多くの比定地をマッピングして決めたりすべきものではない。数量的つまり自然科学的にアプローチすることにより、国の位置や姿を論理的に定めるべきである。

物理的な量あるいは経済的な量として、やはり、『国の人口』が取上げられる。倭人伝はこれを『戸数』で記している。国力を表わすこの数量は、時には『敵の戦力』としても評価されるから、当時の軍事使節としては、まず間違った推定はしていないであろう。後世この『数字』に写し違いがあるとしても、周辺の諸国との常識的比較もあって、大きな間違いは生じにくい。

そこで記述されている戸数を信用して分析することとしたい。邪馬台国は戸数=7万余戸である。当時としては、相当の大国である。3世紀の近隣諸国の情勢は、魏志の東夷伝に記されているから、これを参考にしよう。<sup>3)4)</sup>

近隣諸国のデータによると『高句麗・3万戸で方2千里』『三韓諸国の合計は14~5万戸、国土は方4千里』である。狗奴の国は戸数の記事はないが強力なライバルであった。投馬の国は、戸数5万と書かれている。<sup>2)</sup>

邪馬台国の7万戸が、これらの国と同じ程度の人口密度だったと想定して国土面積を推定してみよう。そのサイズは、高句麗の2倍以上、三韓諸国を合計してその半分程度となる。いまの京城から釜山が当時7千里とされていたこと、朝鮮半島の東西両岸や対馬海峡が4千里程度だったことから考えて邪馬台国の大きさは、千里四方のブロックで7ヶ分(1ブロックに約1万戸と計算)すなわち、九州の半分弱、あるいは四国程度は必要である。

この大きさの国を、不弥国の南などに『独立した国』として比定することは、きわめて難しい。甘木市付近、八女市、山門郡では完全に狭い。吉野ヶ里遺跡が大きいと言っても、7万戸の大都市は物理的に収容できない。いままでの多くの研究に欠けていたのが、都市工学的な考察だったのである。

『邪馬台国・7万戸の大都市遺跡』は見つかることはないのである。100近いと言われる邪馬台国の比定地の大部分は、『国の広さ』の検討から否定されることになる。7万戸規模の大国は、当時の西日本では、2ヶ所ないし3ヶ所しか存在できない。すなわち九州北部、瀬戸内海、あるいは近畿一帯(奈良盆地だけでは狭い)といった大きなスペースを必要とするのである。

邪馬台国を考えるにあたっては、その地理的な大きさから分析を始めることが必要だったのである。見方をすこし変えるだけで、捜し求めている邪馬台国の形にまったく常識的な『解』が存在することを示して行こう。

## 2. 邪馬台国の形

魏志倭人伝解釈の基礎としたテキストを、表・1に紹介する。ここに書かれた内容だけで、邪馬台国への道案内が、矛盾なく解釈できるのである。テキストは、原典である『倭人伝』約2000文字のうち、道案内を記している部分(約520文字であるが)から、官名、風俗等に関する記述を取り除き、邪馬台国に至る『道程』の分析に必要・十分な情報を取りまとめたものである。表に示すように332字から成り、帯方郡から『女王の都』までの道案内部分を原典<sup>2)3)</sup>から厳密に抽出している。

(1) テキストは、対馬(ツシマ)の国から不弥(フミ)の国までを順に記している。『方向・距離・道順』の説明は、不弥の国で終わっている。

(2) 都市工学から分析し、当時の倭国の中心は、奴の国(福岡市)にあり政治・経済とも大きな力を集めていたと分析した。伊都国は、その第1の衛星都市であり、郡との間の外交上の役割を受け持っていたと推定した。郡使がいつも駐まる所と記されており、はるばる到着した郡使は、常時ここに宿泊し、日を改めて女王に会いに行った<sup>4)</sup>と考えたのである。

第2の衛星都市、不弥国は、そこに卑弥呼の宮殿があった宗教都市と考えた。割合新しい国で、伊都国の管轄下にあったと記されている。

(3) 『時間の次元』による案内の記述を分離、全体の構成を明確にした。

イ. 投馬国まで南へ水行20日

ロ. 邪馬台国(女王の都)まで南へ水行計10日陸行計1月、合計40日

この2文は、ペアーで示され、近い方が先に遠い方が後に書かれている。内容は旅行の日数であり時間のディメンジョンを持つことに注意をうながした。3世紀の中国人に、ディメンジョンに関して明確な知識があったかどうかは分からないが、この2文を他の説明から分離してみると、全く新しい全体枠組(パラダイム)が、図・1のように浮かび上がって来た。

表1 邪馬台国を見つけるために必要、かつ充分なテキスト (訳文付)

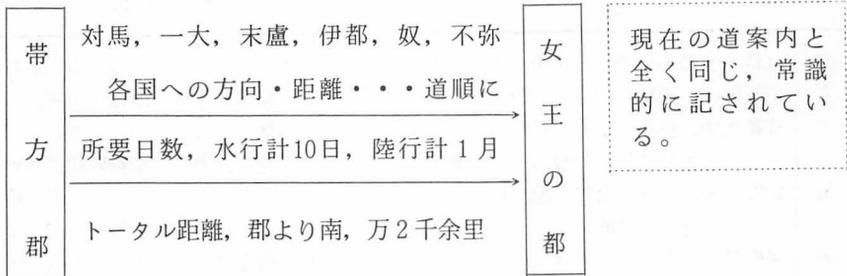
魏志倭人伝 (テキスト)

日本文 (抄) は筆者による。

前文	(倭人在带方東南大海之中, 依山島为国邑, 旧百餘国, 漢時有朝見者, 今使譯所通三十国)	(倭人は带方の東南大海の中にあり今, 使譯を通ずる所は三十国, )
①	從郡至倭, 循海岸水行, 歷韓国, 乍南乍東, 到其北岸狗邪韓国, 七千餘里, 始度一海, 千餘里至对馬国, 有千餘戸, 方可四百餘里	郡から倭までは海岸沿いに水行し, 韓国を経て, 倭の北岸狗邪韓国へ到る。ここで七千餘里。始めて海を渡り千餘里で对馬国。千餘戸方四百里
②	又南渡一海千餘里, 名曰 海, 至一大国, 有三千許家, 方可三百里,	又南へ海を渡る千餘里, 一大国へ至る, 三千許家あり, 三百里四方。
③	又渡一海, 千餘里至末盧国, 有四千餘戸,	又南へ海を渡り, 千餘里, 末盧国へ
④	東南陸行五百里, 到伊都国, 有千餘戸,	至る, 四千餘家。東南, 陸行五百里
⑤	東南至奴国百里, 有二萬餘戸,	で伊都国へ到る, 千餘戸がある。
⑥	東行至不彌国百里, 有千餘家,	東南へ奴国まで百里, 二萬餘戸。東行し不彌国に至る百里, 千餘家。
時間軸	南至投馬国, 水行二十日, 可五萬餘戸, 南至邪馬台 (壹) 国, 女王所都, 水行十日, 陸行一月, 可七萬餘戸,	南, 投馬国へ至る。水行二十日, 五萬餘戸ばかり。
以北の国	自女王国以北, 其戸数道里可得略載, 其餘旁国遠絶, 不可得詳。次有斯馬国, 次有已百支国, 次有伊邪国, 次有都支国, 次有彌奴国, 次有好古都国, 次有不呼国, 次有姐奴国, 次有对蘇国, 次有蘇奴国, 次有呼邑国, 次有華奴蘇奴国, 次有鬼国, 次有為吾国, 次有鬼奴国, 次有邪馬国, 次有躬臣国, 次有巴利国, 次有支惟国, 次有烏奴国, 次有奴国, 此女王境界所盡。	南, 邪馬台 (壹) 国, 女王の都する所へは, 水分計十日と陸行分が計一月かかる, 七萬餘戸である。女王国以北について, 其戸数・道里を, ほぼ記載した, その他の国は遠すぎて詳しくは分からない。それらの国名は次の21ヶ国でありその最後は奴国である。これは女王の境界の盡きる所となる。
21ヶ国		さらに南に狗奴国がある, 女王に属さず。男王である。
狗奴	其南有狗奴国, 男子為王, 不属女王。	郡から女王国まで,
距離	自郡, 至女王国萬二千餘里。	トータル一萬二千餘里。

以上テキスト合計 332 字, ( ) 含まず, 朝日新聞学芸部編「邪馬台国」朝日文庫より。

図1 女王国への道案内



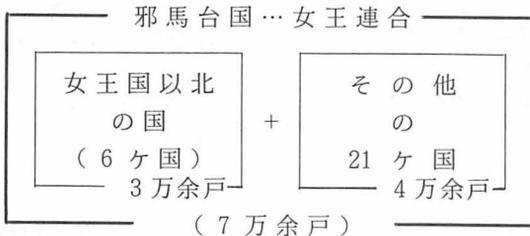
(4) つぎに，集合論的アプローチを試みて，女王国のすがたを図・2のように想定した。邪馬台国は27ヶ国の連合体と推定した。韓諸国の例では，

- イ．馬韓 10余万戸が50余国に分かれている。
- ロ．辰韓と弁韓 合計4～5万戸がそれぞれ12ヶ国に分かれている。

いずれも，全体を作る集合のなかに，部分集合が存在している。『全体』と『部分』のいずれの集合も国と呼ばれているので間違われ易い。

小さい方の国のサイズは，上の国々では平均して1000～2000戸となる。邪馬台国のなかに多くの小さな国が存在し，女王に属する連合国が27ヶ国から成るとしても解釈上ならん問題はない。

図2 集合論から見た国の姿<sup>1)</sup>



(5) 『自女王国以北，其戸数道里可得略載』(女王国以北は，その戸数や里数(距離)を示してあるが…)という原文に注目するよう注意した。

対馬に始まり順次南下して行く国々のグループであって，その南端の国が

女王国である。女王国以北は戸数・官制・里数も説明されていると定義されている。これに続く邪馬台国の説明には『その里数』の記述がない。いや、次元の異なる日数で示されている。女王国以北の国々は『その里数が記述されること』が条件だから、条件に合う国である6ヶ国の最後の、『不弥国』が『女王の都する所』と考えるのが合理的である。

集合論から、国の概念・領域の大きさは、つぎのようであると考えた。<sup>1)</sup>

領域(大) 邪馬台国 = 女王の境界 = 女王に属す所 = 7万余戸

領域(小) 女王国 = 女王の都する所 = 不弥国 = 千余戸

女王国というのは、小さい国で明らかに不弥国を指していたのである。

(6) 距離については、郡から邪馬台国の入り口である対馬まで、すでに8千余里であるから、トータルの万2千余里は、国の中の『女王の都まで』の距離を示していると見た。海峡部分は、その長さを4千4百余里と考えると(古田武彦ほか<sup>5)</sup>) 不弥の国がちょうど女王の都する所になる。

魏志倭人伝による道案内の記事は、その記述に矛盾はなかった。3世紀の大国『邪馬台国』は「対馬・壱岐から博多・不弥国までの6ヶ国」と「その他21ヶ国」を合わせた『連合国』と考えれば良かったのである。

### 3. 邪馬台国研究の概観

研究を概観するにしても、じつに膨大である。専門の学者以外にも、推理作家、町の考古学者など歴史に興味を持つ人々が、邪馬台国の研究に取り組んでいるが、もはや、発表されるすべての文献を参照することは、不可能に近い状態に達している。

邪馬台国を発見するには、原点に戻って、魏志倭人伝の原典を忠実に解釈することから始めねばならない。いままでにない方向からのアプローチが特に有効であると信じている。その際、当時の近隣諸国の状況や、中国の政治の変化も魏志東夷伝などを大いに参照する必要がある。

港湾経済の研究者向けとして分かり易い参考文献を選ぶならば、文末の文献3)、4)がまとまっており、最近の成果は雑誌の特集ではあるが、文献5)6)に紹介されている。手に入れ易い物だが研究の現状を良く纏めている。

中世から、邪馬台国はどこにあったかの論争が続いている。これは日本側の歴史書である古事記、日本書紀が明確にその国の説明をしていない、あるいはそれを避けているところに源を発している。おおまかに言って邪馬台国は、大和説と九州説の対立とされてきた。最近では九州から大和へ政権が移動した止揚説も発表されている。しかしながら、いずれの説も当論の始めに述べたように、邪馬台国を小さな都市国家と捉えている点に問題がある。

邪馬台国大和説では、南を東、旅程1月を1日の『記載ミス』などと、原文を修正せねばならない。しかし、一旦原文を変更すると、その後、無限の『解』を生む可能性がある。原文を修正しないで、しかも合理的に解釈できないだろうかと思ったのが、この研究のスタートだったのである。

振り返ってみれば、古田武彦の対馬海峡の長さは『島々の長さを加える』解釈、榎一雄の『伊都へ到着する』という、『至』と『到』の漢字の差に関する指摘は参考になった<sup>5) 6)</sup>。ただ、伊都の国は、郡使達には到着すべき場所ではあったが、そこから道程が分岐する所ではなかった。

#### 4. 21ヶ国の比定と邪馬台国の地勢

その他21ヶ国は、合計4万戸と計算できる。平均すると1国2千戸ぐらいとなり、その国土面積は約4百里四方と推定できる。これらの国は、倭人伝中の『次に有り…』という字の繰り返しから見て、順番に記されている確度は高い。こうした国と国の隣接関係を保ったまま、弥生時代の遺跡を順につなぎ国を選んで行った。4百余里角とは、壱岐の島よりひと廻り大きいサイズと思えば理解し易い。邪馬台女王国の版図は、前出の報文<sup>1)</sup>に付したので、ここでは、21ヶ国の国名と比定地を表・2として付した。

その他21ヶ国は、2つのグループに分けられる。第1のグループは、博多湾から東向きに海岸線に沿って、ほぼ20キロメートルの間隔で並んでいる。第2のグループは飯塚市にあったイガの国から（内陸部に）やはり時計回りに配されている。山間部では国と国の距離はすこし大きくなっている。『解』が常識的なせいであろうか、現在の地名と良く似ている場所が多い。

13番の鬼の国は、位相幾何学手法による確定では、佐伯市、竹田市、ある

いは八木山峠の城戸付近でも、矛盾を生じない。この手法は1～2の国が未確定でも、全体のバランスとつながり具合から、未知の国の立地点を推測できる利点があるが、屈折点での解釈の際に自由度が大きくなる。

各国はおおむね河川に沿って立地し、それぞれ平野部を有している。水と

表2 その他21ヶ国の想定結果（福岡県／大分県／佐賀県）

No.	倭人伝の国	読み	想定した地域（現在）
北九州海岸線沿いのグループ	① 斯馬国,	シマの国	志賀の島付近
	② 已百支国,	ミヤジの国	宮地嶽／宗像付近
	③ 伊邪国	イヤの国	いさぎ／水巻町付近
	④ 都支国,	クキの国	洞海湾／北九州市
	⑤ 彌奴国,	ミナの国	蓑島／行橋市
	⑥ 好古都国	ココツの国	中津（豊の中津）町
	⑦ 不呼国,	フコの国	宇佐（深池）付近
	⑧ 姐奴国,	ソナの国	姫島／伊美付近
	⑨ 対蘇国,	トスの国	国東町付近
	⑩ 蘇奴国,	スナの国	杵築市付近
	⑪ 呼邑国,	コユの国	別府（アタツ）市
	⑫ 華奴蘇奴国,	カナスナの国	朱の産地／大分市付近
⑬	鬼国,	キの国	防衛拠点（未確定）

内陸部のグループ	⑭ 為吾国	イガの国	飯塚市付近（伊川）
	⑮ 鬼奴国,	キナの国	香春岳付近
	⑯ 邪馬国,	ヤマの国	山国川／山国郡
	⑰ 躬臣国,	クジウの国	久重町付近
	⑱ 巴利国,	ハリの国	把木町付近
	⑲ 支惟国,	キイの国	鳥栖付近
	⑳ 烏奴国,	ウナの国	吉野ヶ里付近
	㉑ 奴国,	ナノ国	八女市付近／山門郡

㉑番目の奴国（此、女王境界盡くる所、其南に、狗奴国有り）

農地が国の重要な立地条件となっていた。壹岐・対馬などの島々では、天然の良港があるものの、農地は限られ、対岸交易に従事していたのだろう。

このように、具体的に版図が示されたことにより、邪馬台国の地勢分析が初めて可能になった。その地理・経済についての分析にも手を付けることができる。国は27の『小さな国』から構成されており、北九州地区に広がっている。対馬海峡・響灘に面した北海岸、伊予灘・豊後水道に面した東海岸、有明海に面した西海岸（あるいは筑後川流域）と三方に海を有している。

潮汐の落差が5～6メートルと大きい有明海は、敵となる狗奴の軍もいて安全な航海は難かしいと考えて良い。日本海側と瀬戸内海側の海が利用されたことであろう。関門海峡についての記述がないが、将来の研究課題である。

話が飛ぶがタイ語で『田』は『ナー』と言う。稲作の伝播から時代も近い邪馬台国でも、田地が『ナー』だったのではないか（中国南部、シーサンパンナーのナーと同じ）と考えている。邪馬台国で『田地』あるいは『平野』を持つ『国の名』に『奴』が多く使われていることに気付いたからである。

山地と平地を明確にした『パネル』を作り検討した。結果は表・3にまとめて見たが、『平野』と『奴』の関係は無視できるものではない。逆に言えば

表3 国名に『奴』の付く国と田地の関係

地形と特徴	奴が付く	奴が付かない
島か海岸で 平地狭し		対馬 一大 末盧 斯馬 已百支 伊邪 好古都 不呼 対蘇
平地やや有り	姐奴 蘇奴	都支（クキ）呼邑（コユ）
平地広し	奴 彌奴 鬼奴 烏奴 奴（南端） 狗奴 = ライバル	① 為吾（イガ） （その他21ヶ国中の主要国）
内陸部で 平地狭し		鬼 邪馬 躬臣 巴利 支惟
その他・特殊	② 華奴蘇奴	伊都／不弥 （サテライトタウン）

ば『平野』の少ない国に『奴』は用いられていない。そして、もし次の2国を例外として除くならば『田地 = 奴』の関係は更に否定しがたいものとなる。

例外① 山地が多い『華奴蘇奴』国に『奴』が2ヶ用いられている。

例外② 強大な『為吾』国に『奴』が付いてない。

①については『華奴蘇奴』が朱 = 辰砂の和名を表音文字として表しているためであろう。また、②については、この国等が『奴』国の強力な『ライバル』であったため、国に『奴』の文字を避けたのではないかと考えられる。

倭人伝の記事の中には、内乱が続きついに女王卑弥呼を擁立して国が静まったと伝えられている。しかし、その女王が亡くなった時、ふたたび内戦が生じ千人もの死者が出たという。連合国の結合は固いものでなく、常時、奴国と為吾国の連合が対立していたと推測される。女王はその『統合のシンボル』の位置にあり、奴国に近い『不弥』の宮殿に居たのである。

## 5. 邪馬台国の海運・貿易

原文には洛陽との間の交通、貿易に関しての少なからぬ情報が含まれている。その間の行き来は幾度もあった。郡から洛陽までの距離は、郡と女王の都の間のほぼ2.5倍である（地図から読み取る）。現在京城～釜山間の鉄道は420キロメートル、対馬海峡は220キロメートルであるが、当時この計が約万2千里とされていたのである。郡と洛陽の距離は、2万～2万5千里と考えられていたのであろう。合計4万里弱である。郡から女王国まで40日の比率で計算すると郡から女王国の全行程は120—140日、陸路で20—24キロメートル/日の移動となる。

倭人伝は邪馬台国の貿易や使節団の記事を伝える。中国で政変があるとか遼東半島の交通事情が緩和されるとか、中国サイドの動きに敏捷に反応して使節が送られている。常に情勢をモニターしている気配である。対馬・一大国が貿易で生計を立てていたことが記されているが、政治情勢のモニターとなると、頻繁な往復、資力、強力な組織的バックアップが必要となる。

倭人が、漢王朝を西暦57年に訪れて以来、同107年師升王の使節、そして中国の政治的な変化に対応して、西暦三世に派遣された『女王の使節』の

記事から、大陸の情勢を『常に注視している倭の王』の存在が感じられる。

239年 = 景初3年<sup>8)</sup>の女王・卑弥呼の使節は、邪馬台国中の経済大国、『奴のシマコ(王名)』が率いていたのではないかと、筆者は推測する。

これはサミット外交である。邪馬台国が中国に送り皇帝に謁見する使節の長には、国のトップクラスの実力者を選ばねばならない。女王府には政治・軍事の力はなかったと考えた。国の実力ナンバーワンは『奴のシマコ』である。中国に赴いた使者の『難升米』は、軍旗 = 黄幢も賜わっている。これは国王か大將軍の扱いと考えておかしくない。

それから推測すれば『難升米』は、ナノシマである確度が高い。女王の治める国の中で、中国から『王の旗印』を授かるような『武人の王』があったとすれば、シマコ以外該当する人は考えられないのである。

この考察の結果から、さらに遡って1、2世紀の倭国の使者も、当時の経済活動の中心・倭の『奴』の国から送られたものと考えて良いだろう。倭の王『師升』も、その役職名『シマ』だったのではないだろうか。倭人伝では邪馬台国は、3世紀半ば迄200年、他の国から征服された記録もなく(ただし、内乱は奴と為吾の対立などで続いたらしいが)存在していた。その対岸貿易も200年以上の歴史があったはずである。

邪馬台国時代の船の絵は、前出<sup>1)</sup>で紹介したが、28の權を持つ外洋航行船である。軽量の丸木船らしいが、弥生時代の海峡貿易の歴史の中で、船の改良も進んでいたはずで、その年代推定は興味ある研究課題となるだろう。

200年以上の海峡貿易の歴史となると、収奪、朝貢だけでは、交易の維持は難しい。南北に市糶(してき = 買物)する対馬・老岐の人々も、なにがしかの輸出品があって、友好と貿易のバランスを計っていたに違いない。

輸入すべきものは、食料、韓国産の鉄、青銅製品等当時のハイテク製品を含め、品種も多岐にわたる。一方、邪馬台国の輸出品は、生口と呼ばれる奴隷 = カラユキさん(?)だけでは不足。魚の乾物、昆布、布、など中世の輸出品と大して変わらない品目もあったであろう。当時、貿易の決済に金を用いた記事はない。貴重な産品としては、真珠、玉(青勾玉)、そして丹が記述されている。輸出品の中で、丹は貴重であったと思う。

邪馬台国発見の鍵は丹（朱）の産地の確定にあると考えていた。21ヶ国の比定を進めてゆく段階で、奴の字が2度も使われているカナスナの国が、じつは『朱丹』の産地であり、国名もそれに因むことが推測されることとなった。また中国から女王に『お返し』の品が下されているが、『真珠50斤』が含まれている。中国の産物であって、重さで計るものとしては、パールではなく、上質の朱丹ではないだろうか。これから、『かすかな』が、当時の貿易において通貨代わりに用いられたのではないかと推測している。

## 6. 邪馬台国のみなと

経済の中心、戸数2万の大都市国家、洛陽以東で最大の都市が『奴』であった。中国側が注目していたのも納得できる。このサイズになると、もはや登呂遺跡に復元されているような、草葺きの家ではないはずである。この時点で、すでに商業都市が発生していたと考えられる。その形はこれから都市工学的な発掘により確認できるが、想像以上に中世的な姿を見せるだろう。

経済・外交の中心は、やはり大都市・奴国にあった。貿易立国タイプの都市と考えてよい。飯塚市にあった『為吾の国』は、対岸貿易においてライバルであるとともに、関門海峡を抑え、瀬戸内海地域との貿易も支配していたことが想像できる。立岩遺跡に豪華な副葬品とともに埋められている王者達が代々『シコオ』と呼ばれていたのであろう。

両国は、女王の下で平和共存を約しており、国の意思決定は不弥における会議によるが、時には卑弥呼の神託に従うこともあっただろう。

対岸貿易・瀬戸内海貿易の経緯、規模は、北九州内外各地の石器、土器、青銅器、鉄器の発掘と産地の推定から明らかにされるが、卑弥呼の時代まで約200年間の交流は、わが国古代文化の形成に大いに役立ったに違いない。

貿易のタイプ別に『邪馬台国の港』を分類し、表・4に示した。予想していたかのように、港と全く関係ないのが『不弥国』であった。

税関もあった・・・港の管理に付いての貴重な記述がある。『郡の使いが倭国に及ぶや、みな津（港）に臨んで搜露（調べをつくす）し、文書・贈り物を伝送して、女王の下に届けるが、差錯することはない』である。

表4 邪馬台国の貿易とみなと（構成27ヶ国について）

対岸（韓国，魏志倭人伝）貿易のみなと	
1) 対馬国（島嶼良港多し） 2) 一大国（島嶼良港多し） 3) 末盧国（呼子湾は良港） 伊都国 5) 奴国 ———— ・那珂川河口 不弥国	九州の 北 海 岸 ①斯馬国，（志賀の島付近） ②已百支国，（津屋崎港） ③伊邪国 ———— イサザ・オカの港 ④都支国—天然の良港洞海（クキ）湾 ⑭為吾国 ・・・・遠賀川遡上 ⑮鬼奴国

対 瀬戸内海貿易のみなと
⑤彌奴国 ⑥好古都国・・・・⑯邪馬国 ⑦不呼国 山国川沿い ⑧姐奴国， ⑨対蘇国 ⑩蘇奴国 ⑪呼邑国 ———— 別府湾 ⑫華奴蘇奴国 ———— 潮位差小 ⑬鬼国（未定）

筑後川や有明海に面する河川港	
筑後川沿い	⑰躬臣国   ⑱巴利国   ⑲支惟国   ⑳烏奴国，西の防衛拠点・ サガヤマトチョウ ㉑奴国，南の防衛拠点・ヤマトグン

この文の津がどこか書いてないが、『津に臨む／調べをつくす』となると特定の場所が港とされており、そこに港の役所が存在した。中国の使節を休憩させる、荷物を検査し、保管し女王まで配送する機能は確保されていたらしく、中国の使節も感心したのか記載している。大勢の漕手と船団の維持には、経済的基盤の整備も行われていたことが推測される。

外事通として、郡との交渉を担当していた『伊声耆（イセキ）』、『掖邪狗（エキヤク）』は、中国から戴いた『率善中郎将』の位の高さから見ても国の重要ポストにあったはずである。『将』の「もう一人」がナのシマコであるならば、この二人伊声耆と掖邪狗は記述の洩れている『末盧国の官、副』程度の位置を占めなくてはバランスがとれない。もしかして、わが国史上初

の港湾管理者だったのではないかと思っている。

## むすび

魏志倭人伝の記事を地理学的に分析すると交易の状態、みなと、そして都市の姿まで推定可能なことをここで示した。いま述べたパラダイムを立証する邪馬台国の都市や港の遺跡や遺物の出土が待たれる所である。

邪馬台国の東半分の国についての分析が残ったが、これは別に機会に護りたい。児湯（呼邑）と呼ばれる現別府市まで、博多湾から船で周旋すると、当時の里数で、約5千里になることだけ、付け加えておきたい。

邪馬台国のこの後の運命や、投馬など当時の国々の研究、わが国の『歴史書・記紀』が、それらをどうして記載していないかの検討も、興味あるところである。たとえば2万戸の大国『奴』だが、これだけの強力な国が記紀<sup>7)</sup>に無視されている。邪馬台国や卑弥呼と同じく、シマコの記事はない。

推察するところ、奴の王シマコは、どうやら『オオナムチ・スクナヒコナ』として述べられているようであるし、為吾の王は『アシハラシコオのいはイカガシコオ』として記述されているようである。さらに、ナノシマコは、いつしか、大阪地方に移動しており、『なの州（シマ）彦』の読みも『ナガス（州）+ネ+ヒコ』と変えて登場している気配がある。

3世紀の倭国『邪馬台国』の経済力を支えたのは、奴の国を中心とする貿易経済であった。その中心であった都市（後の博多）も、考えられているよりはるかに中世的であっただろう。奴の王『シマコ』が、古代世界の政治／経済活動の解明の鍵を握っていると著者は考えている。8世紀・歴史編纂にあたり（直接の記載を避け）暗号化して記述されていた倭人国古代史<sup>7)</sup>も、いま解明の糸口を与えられようとしている。

注(1) 小合彬生「三世紀北九州のみなと」（港湾経済研究『第28回大会年報』北九州市、1989年10月）204頁

(2) 魏志倭人伝、後漢書倭伝、宋書倭国伝、隋書倭国伝。中国正史日本伝(1) 新訂 石原道博編集、『岩波文庫』（岩波書店、第48刷、1988. 4. 8）

- (3) 朝日新聞学芸部『邪馬台国・朝日文庫』（朝日新聞社昭和61年5月）
- (4) 安本美典『卑弥呼と邪馬台国・21世紀図書館』（PHP 研究所，1983.9）
- (5) 特集 邪馬台国は九州にあった—吉野ヶ里遺跡が解き明かす卑弥呼の世界  
監修 古田武彦（『ニュートン』，1989年9月号）58頁。
- (6) 特集 邪馬台国の謎に迫る 森 浩一，上田正昭ほか  
（『プレジデント』，1989年7月号）57頁。
- (7) 太田善麿『古事記物語（若い人への古典案内）— 現代教養文庫』  
（社会思想社—文庫 717— 1971. 3. 30）
- (8) 『邪馬台国・朝日文庫』<sup>3)</sup> 260 頁，年表から難升米派遣は，AD 239 年。